

②命令という言葉の中の命令者はいったい誰なのだろう。権力者即命令者はいつの時代にもいた。その中の一つ「世紀末」の事情を辞典の中に見てみよう。

ーボードレールがカフェで小児の脳味噌を食べた経験談をマコトしやかに談じていた舞台、世紀末は貴族にとって代ったブルジョアジイの凡庸さ俗趣味に飽足らず、単に”ブルジョアを驚かす”という理由のもとに奇想天外な行動をあえてした。

この短い文の中にさえ、命令者としてのブルジョアが許した「驚かす」範囲が示されている。即ち命令者は体制のみが重要であり、それへの延命策は如何なる手でも使うのだが、歴史は、いつの時代も次の命令者が現われている。ブルジョアが許した驚く範囲は、ワイルドが釦紐孔に一輪のバラの花をさした礼服を日常に着用したということであり、表面に現われたものとしてはダンディズム乃至サタニズム デカダンタイム、唯美主義、エピキュリズム、デイレッタンタイム、ボヘミアン等々であった。

これ等に擬装されながらも次の命令者、黒い太陽「パリ・コミューン」は、着々と民衆の渴望に応じて成長していき、遂にロシア革命となった。

A、さて現在の命令者は？ 世紀末同様、日本においてはブルジョアだ。現代的言葉でいえば日本独占資本家だ。しかし日本とことわらねばならぬ歴史的現実がある。即ち社会主義国群の多量発生だ。それと同時に渴望的理想であった”パリ・コミューン”は消え、そのあとにきたものは義務の時代だ。これを説明すれば、ブルジョアが許した「驚かし」はニヒリズムとなって人々をいやし、擬装したブルジョアはファシストの同志討ちにあつて、コミュニズムと手を握らざるを得なくなりお互いに命令者も、命令される方も、擬装の時代で迎えた今世紀は、擬装に奥深くかくされて争われた”パリ・コミューン”の厚化粧をはぎとり、ソ連を中心として中国、東欧と、次に戦略を明確にして来た。その結果、命令者の形がダンダン不明となって来たのだ。

例えば資本主義国では、“消費者王様”と、多分にまだ擬装されているとはいえ、命令者不明の言葉と、消費者協会という体制が出来つつあり、日本のデパートが歌舞伎で消費者を招待している現状だ。それに反し、黒い太陽のように、輝く神通力を持っていた”パリ・コミューン”は実現し、もはや神通力を失くして、それは義務的要素としての革命が残っているに過ぎない。その例として、中国共産党のいいぐさではないが、強烈な二つの命令者が思想で戦わずに、核問題が最高命令点となった現今、だれが、核問題で死を賭けるものか。即ち”パリ・コミューン”には死が賭けられる程の命令的情熱理想があり血を沸かせたが核問題にはそれが無いのだ。現状維持という非常に消極的な命令者不在の状態と呼ばねばならぬものだ。

B、命令という言葉から発して、次の時代の命令者までを求める時、命令者不在ということになってしまった。しかし、以上は体制的意味あいからだったが、超人間的命令者、神の場合は、どうなのだろうか。